

Title	下北半島における旧石器時代遺跡研究の重要性：遺跡・遺物と動物化石の検討から
Sub Title	Palaeolithic and faunal remains from Shimokita Peninsula, Aomori
Author	阿部, 祥人(Abe, Yoshito) 奈良, 貴史(Nara, Takashi) 米倉, 薫(Yonekura, Kaoru)
Publisher	三田史学会
Publication year	2002
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.71, No.2/3 (2002. 6) ,p.301(437)- 319(455)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20020600-0301

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

下北半島における旧石器時代遺跡研究の重要性

—遺跡・遺物と動物化石の検討から—

阿部 祥人
奈良 貴史
米倉 薫

1 はじめに

本州最北に位置する下北半島では、北海道やさらに北方の地域との関連において重要な先史・歴史時代遺跡が多く分布しているが、旧石器時代の遺跡・遺物は、僅か数ヶ所に数点ずつ認められているのみである。旧石器時代の自然環境、ことに最終氷期の海面低下に伴う地形の変動は、この半島でのヒトと動物にことに大きな影響を与えていたと考えられる。そうした観点からも、この地域に旧石器時代の遺跡の分布密度がきわめて低いという点については、一考を要する。

一方、下北半島北東端の尻屋崎周辺の石灰岩地帯からは、人類史では旧石器時代に相当する後期更新世に属する動物化石の出土が、数多く報告されている（中島他一

九五七・長谷川他一九八八）。そのような遺跡・資料分布上の偏向を踏まえて、日本旧石器時代の研究を人骨や動物相を極力加えた形で、総合的に進めようと努めてきた筆者等は二〇〇一年夏、かつてオオツノシカ化石を出した尻屋崎を中心に踏査した。その結果、下北半島における旧石器時代研究の可能性に関わるいくつかの新たな知見を得ることが出来た。本稿では、これに基づき、下北半島における旧石器時代遺跡研究の重要性について述べる。

2 遺跡・石器からの検討

(1) 既報告の旧石器時代遺跡

物見台 (一) 遺跡

本遺跡は、太平洋戦争中から終戦直後の頃にかけて、

地元の人によって採集された六点の石器によって、その存在が古くから知られていた(橋一九九四)。遺物発見の時期からいえば、日本旧石器時代研究の先駆けとなった岩宿遺跡の発見に前後するものである、とも言われている。しかし、この遺跡の旧石器時代の検討を目的とした発掘調査が行われたことはなく、石器と遺跡が詳しく紹介されたのは、ごく最近になってからのことである(工藤二〇〇一)。

遺跡は下北半島北東端、尻屋崎の突端から約1キロ南西の津軽海峡に面した、標高わずか15m程の海岸段丘上にある(図1)。資料の石材は全て頁岩である。また、これらの石器は、表面採取されたもので、正確な出土層は不明である。昨年、我々が東通村の関係者等と現地を検討した際にも、遺物包含層に関する状況は、解明できなかつた。しかし、資料の中には、東北日本の旧石器に共通する明瞭な特徴を示すナイフ形石器二点と、エンドスクレイパー一点が含まれており(図2)、当資料及び遺跡は旧石器時代に属すると判断出来る。

中野 (一) 遺跡

- 中野 (一) 遺跡は、下北半島においては、物見台 (一) 遺跡に次いで発見された第二の旧石器時代遺跡と

して、昨年刊行の「東通村史」に初めて紹介されたばかりである(工藤二〇〇一)。遺跡は物見台(一)遺跡とは尻屋崎を挟んで反対側の太平洋に面した砂丘上にあり、標高は5mである(図1)。採取された遺物には縄文時代の石鏃等も含まれているとされる。報告された資料は七点で、これも全て頁岩製の石器である。その中には、彫刻刀形石器及び、彫刻刀形石器の刃部作製に伴って剝離された削片(スポール)が、それぞれ一点ずつ含まれている(図2)。残りの五点は、石刃状の剝片である。海岸付近における砂上の採集資料であるため、これら七点すべてが旧石器時代に帰属すると断定するには、やや問題があるものの、石刃状の剝片は彫刻刀形石器の素材に近似した特徴を示している。また、後述の橋本喜一資料のほとんどが、この遺跡を含む防衛庁下北試験場から採取されていることを勘案すれば、存在が想定される複数の旧石器時代遺跡の一つが、当該地にあった可能性は高い。

(2) 新発見の遺跡・遺物

発見の経緯

筆者らは二〇〇一年八月に、むつ市の橋善光氏及び東

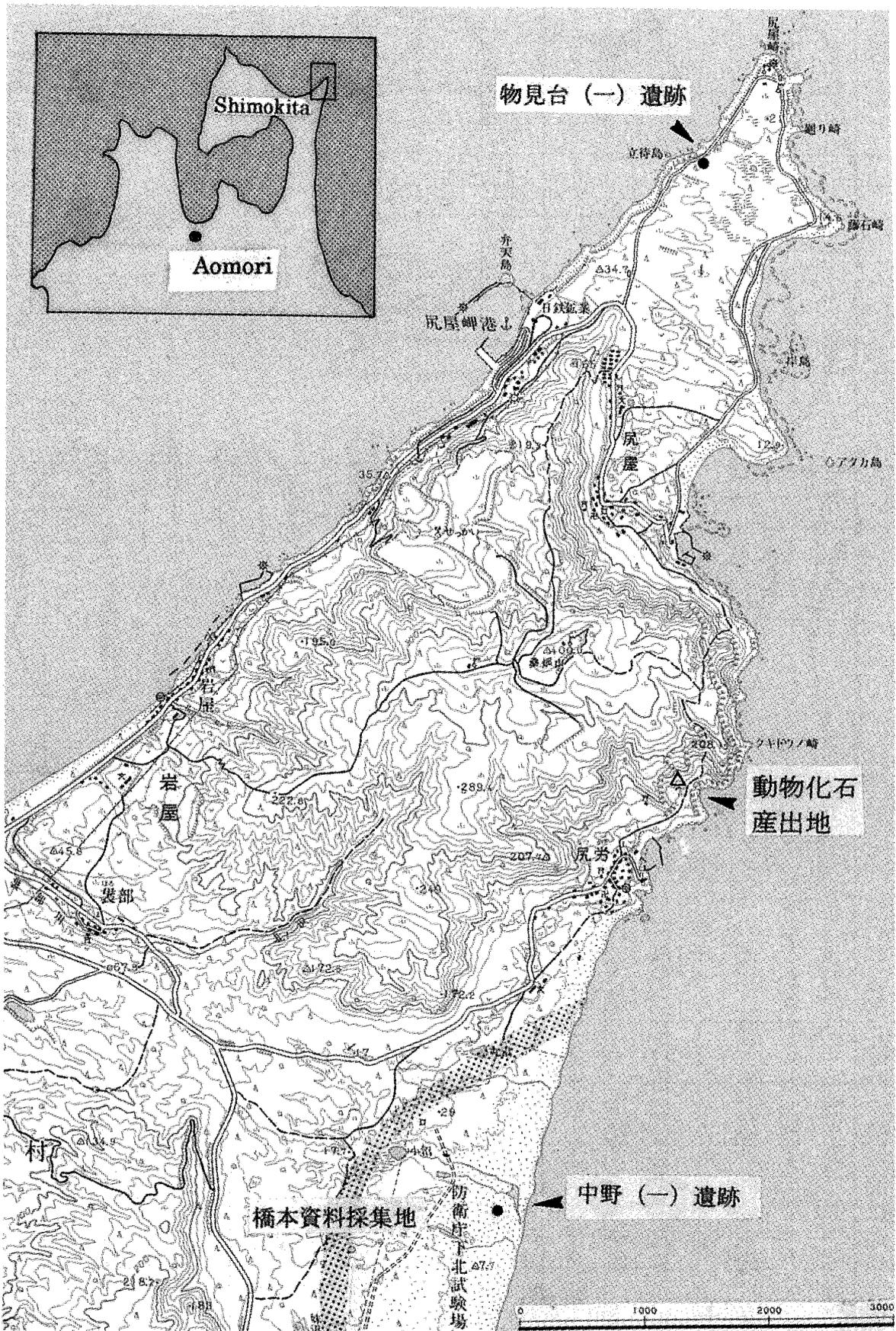


図1 尻屋崎周辺の旧石器関連遺跡

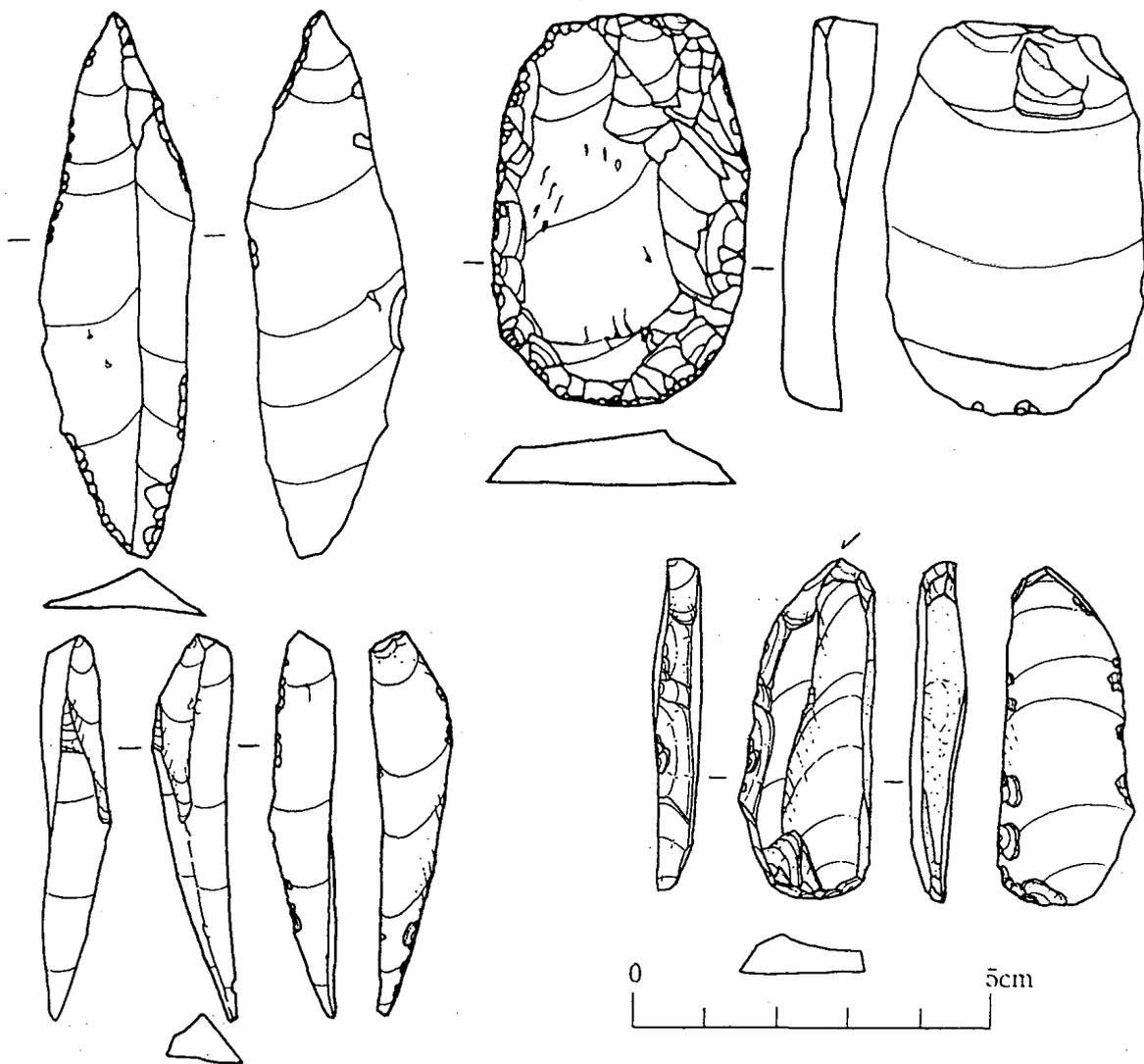


図2 物見台 (一) 上段・中野 (一) 出土資料 工藤(2001)より作成

通村を訪ね、後述のオオツノシカ化石の出土地周辺の動物化石や遺跡に関する教示を得た。その折に東通村役場に展示されている主に縄文時代の石器資料の中に、旧石器時代に属すると考えられる何点かの資料が混在していることに気が付いた。そして、教育委員会の方から、それら資料群の採集者・採集地に関する情報を得て、採集者の橋本喜一氏(東通村・猿ヶ森在住)からも出土地などに関して、詳細を直接伺うことが出来た。その結果、旧石器時代に属すると見られる資料が採集されたのは、尻労地区の南方に位置し、先述の中野(一)遺跡を含む防衛庁下北試験場内の複数の分布地であることがわかった。そしてその範囲は、太平洋の海岸に接した広範な砂丘地帯であることが判明した(図1)。

さらには、下北半島において動物化石の採集と研究を積極的に進めていた

中島全二氏の資料群を橋氏のお宅で拝見した折には、それらの中に七点の細石刃が一つの容器に保管されているのを確認することが出来た。これらの採取地点は明確ではないが、中島氏の研究活動域や同時に保管されている化石資料の出土地との関連から、下北半島内、特に尻労地区周辺を中心に採取されたものであると考えられる。

こうした状況を踏まえ、現地での検討の結果、すべて表面採取ではあるが、両氏採集資料のうち形状等の特徴から旧石器時代に属すると新たに判断された二〇点をここに報告する。以下、これらを「橋本資料」、「中島資料」とする。

橋本資料と中島資料(図3・4、写真1・2)

報告する石器は、二次加工剥片一点(図3・1)、ナイフ形石器六点、(図3・2~7)、尖頭器一点(図3・8)、エンドスクレイパー一点(図3・9)、および細石刃十一點(図4・1~11)である。そのうち細石刃1~7が中島氏採集資料、その他はすべて橋本氏採集資料である。使用石材は頁岩が十二点と最も多く、その他に瑪瑙製石器が六点、黒曜石製石器が二点認められている。瑪瑙製石器は全て中島資料の細石刃である。全点を通して、同一母岩と判断される資料は見られなかった。本報告資料は

全体的に埋没後の表面変化が著しく認められ、特に図3に掲載された資料は、剝離面の稜が磨耗し、剝離面が明瞭でない資料が多く含まれている。また頁岩製石器は表面が強い光沢を帯びる傾向にある一方、黒曜石製石器はスリガラス状に変化するなど、石材によって表面性状の変化に差がある傾向が看守された。以下、各々の資料について詳細を述べる。なお、文中で言及している石材の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に準拠した。

図3・1は黄褐色にぶい黄色の硬質・緻密な頁岩を用いた剥片石器である。素材基部に平坦な連続剝離が観察されており、基部調整のナイフ形石器と解釈することも可能であるが、石刃を用い、急斜度のブランディングを施したナイフ形石器(図3・2~7)と区別するために、ここでは二次加工剥片として報告する。先端部が裏面側からの衝撃により欠損しているが、もとの剥片の全体形状を大きく改変するものではなく、素材として小型で長幅比の小さい剥片を用いた経緯が窺える。左側縁中央部正面側に微細な剝離痕が連続して認められる。「最大長30・9mm、最大幅22・5mm、最大厚5.4mm、重量3.1g」

図3・2は小型のナイフ形石器先端部である。基部を

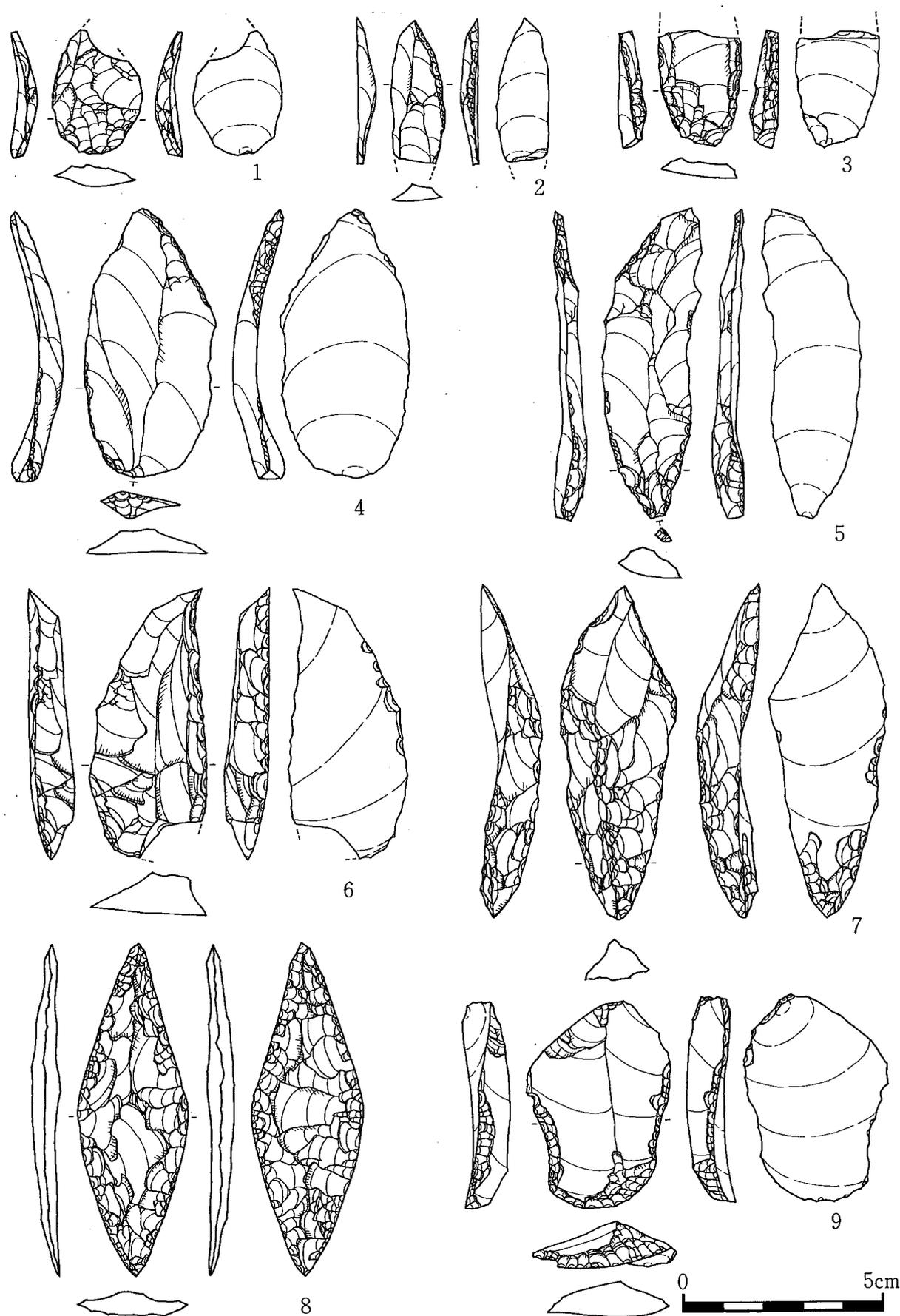


图3 旧石器類 (橋本資料)

正面側からの衝撃により欠失しているもの、素材には小型の石刃を利用していると判断される。利用石材は灰色の硬質・緻密な頁岩である。正面右側縁に小型の連続剥離が認められる。〔最大長35・5mm、最大幅13・1mm、最大厚4.5mm、重量1.9g〕

図3-3は灰白色を呈する頁岩製ナイフ形石器基部の遺存資料である。資料の大半を欠失しているため、素材の平面形状は確認できないが、両側縁に急斜度の調整が認められ、かつ器体に厚みがあることから、現状で把握される平面形状よりもさらに幅のある石刃を素材として利用していたと推測される。右側縁にはサイズの異なる2種類の剥離面が認められ、比較的大きい剥離を先行して施した後、当該部にさらに精緻な調整を行なった経緯が看守される。左側縁には非常に微細な剥離痕が連続して認められている。〔最大長27・2mm、最大幅20・5mm、最大厚6.9mm、重量3.7g〕

図3-4は黒曜石製のナイフ形石器である。右側縁上部に規格的な連続剥離が認められているが概して剥離頻度は低い。基部両側縁に観察される微細な剥離痕は規格性が低く、意図的な加工ではない可能性もある。正面上半では器体表面がスリガラス状を呈しており、稜の磨耗

が顕著に認められる一方、正面下半および裏面側では剥離痕は明瞭に観察され、表面も光沢の強い黒曜石特有の性状が認められており、風化に伴なう表面変化が一点の石器でも一様でない。〔最大長67・0mm、最大幅31・6mm、最大厚7.3mm、重量12・7g〕

図3-5は灰色～黒褐色を呈する頁岩製の完形ナイフ形石器である。基部および先端部左側縁に急角度の調整が認められるが、素材の全体形状を大きく改変するものではなく、剥離軸がやや湾曲する石刃を素材とした経緯が窺える。調整は正面側に限定して行なわれている。埋没後の風化は殆ど認められず、比較的明瞭に剥離痕が観察される。〔最大長77・8mm、最大幅21・5mm、最大厚5.9mm、重量10・3g〕

図3-6も5と同様、頁岩を材料としたナイフ形石器である。灰黄色～暗灰黄色を呈している。当資料および図3-7に示したナイフ形石器は素材打面側を上部に設定して整形を行なっているのが特徴である。右側縁に施された急斜度のブランディングは、図3-3と同様、大小二段階の連続剥離によって行なわれている。左側縁下部にも若干の剥離痕が観察されるが、規格性、剥離頻度ともに低い。調整が施された右側縁部分で厚みが増す断

面形状を呈している。また主要剝離面の観察から、素材剝離時の打点がやや離れた位置にあったと推測される点を考慮すると、素材には大型の剝片を利用し、かつその平面形状も、続く二次加工によって大きく改変されている可能性がある。裏面右側縁にはやや大きい剝離痕が散見される。材料として用いられた頁岩は他の頁岩製資料と比較して、器体表面の光沢が少なく、やや肌理の粗い性状を呈している。また稜の磨耗等の風化が殆ど認められていないことから、埋没後の表面性状の変化に関して、埋没環境とともに、元の石材性状も影響している可能性もある。〔最大長68・5mm、最大幅29・6mm、最大厚10・9mm、重量17・0g〕

図3・7は透明度の高い黒曜石を用いたナイフ形石器である。器体中央部の稜上から左右両側縁に向けて連続する剝離痕が観察されることから、石核調整の際に生成された剝片を利用して製作されたものと考えられる。基部および右側縁上部に加えて、裏面にも規格的な二次加工を施して形状を整えている。全体的に風化が著しく、中でも正面の左右両縁辺付近および裏面基部において、稜の磨耗およびスリガラス状への表面変化が顕著に観察されている。一方、正面中央稜線上では比較的、剝離が

明瞭に観察されることから、図3・4と同様、一つの石器においても風化作用に偏りのあることが指摘できる。〔最大長84・2mm、最大幅28・5mm、最大厚12・0mm、重量19・7g〕

図3・8は暗灰黄色～黒褐色を呈する頁岩製尖頭器である。全体的に薄手で、若干裏面側に反る側面観を呈する。表裏両面ともに器体内奥部にまで達するやや大きめの剝離によって全体形状を整えた後、小型の連続剝離を施して最終的な成形を行なった経緯が推測される。打点の残る剝離面は裏面側に卓越して認められている。〔最大長82・5mm、最大幅27・2mm、最大厚6.3mm、重量11・7g〕

図3・9は頁岩製エンドスクレイパーである。風化による表面性状の変化が著しいものの、黄褐色を呈する硬質・緻密な石材を利用して推測される。素材左右両側縁にやや平坦な剝離を連続して施す一方、末端部に当器種特有の角度の大きい連続剝離が認められている。素材剝片の打面は複剝離面によって構成されている。〔最大長51・4mm、最大幅36・4mm、最大厚10・1mm、重量15・4g〕

図4・1～11に掲載した資料はすべて細石刃である。

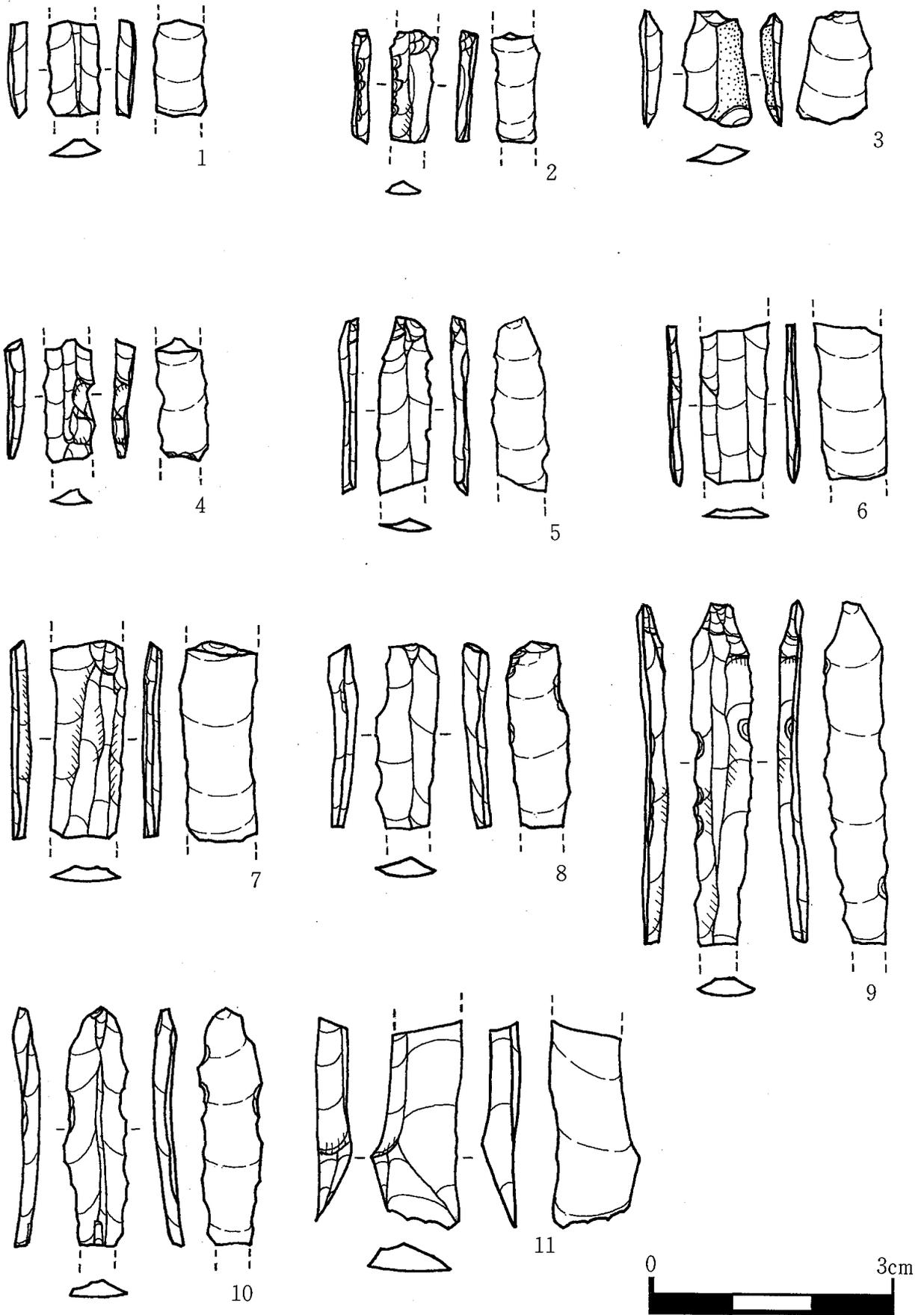


図4 細石刃 (1~7: 中島資料, 8~11: 橋本資料) 実大

各資料の欠失部位は、末端側四点(図4・5・8・9・10)、打面側一点(図4・11)、打面側・末端側の双方五点(図4・1・2・4・6・7)となっている。なお、一点のみ(図4・3)がほぼ完形である。図4・1～6は瑪瑙製、7～11は頁岩製である。

図4・1は若干緑がかつた灰色を呈する透明度の高い石材を利用している。左右両側縁裏面側に非常に微細な剝離痕が連続して認められるが、裏面右側縁と比較して左側縁に観察される剝離痕が若干大きく、かつ縁辺がジグザグ状になっている。上下端に折れ面が観察されており、裏面下端の折断面に接した部分に微細な剝離面が数枚観察されている。〔最大長11・9mm、最大幅6.4mm、最大厚2.0mm、重量0.2g〕

図4・2は褐色の瑪瑙を用いた細石刃である。背面に横方向からの剝離面が観察される。本資料も左右両側縁の、特に正面側に微細な剝離痕が観察される。左側縁に観察される剝離面は右側縁と比較して若干大きい傾向があり、図4・1と同様、両者に違いが見受けられる。〔最大長13・9mm、最大幅5.9mm、最大厚2.1mm、重量0.2g〕

図4・3は灰白色の透明度の高い瑪瑙を利用した、ほぼ完形の細石刃である。背面右半には礫表面が遺存し、

左右両側縁が平行でない点で他の細石刃資料と若干異なる平面形状を呈する。左右両側縁には微細な剝離が若干認められるが、他資料と比較して顕著ではない。〔最大長13・8mm、最大幅8.1mm、最大厚2.5mm、重量0.3g〕

図4・4は黄橙色を呈する瑪瑙製石器である。背面右半に認められる数枚の剝離面は剝離方向が一様でなく、その影響で右側縁が若干湾曲する傾向にある。裏面側に微細な連続剝離が観察される。〔最大長15・0mm、最大幅6.3mm、最大厚2.1mm、重量0.2g〕

図4・5は緑がかつた灰色を呈する瑪瑙製細石刃である。正面右側縁上部に剝離痕が数枚認められ、また裏面右側縁上部にはさらに小型の微細な剝離が観察されているが、全体的にその出現頻度は低い。〔最大長21・8mm、最大幅6.5mm、最大厚2.1mm、重量0.3g〕

図4・6はオリブ灰色を呈する非常に薄手の資料である。裏面右側縁に微細な剝離痕が連続して観察される。他は正面両側縁および裏面左側縁、上下両端に剝離面は殆ど認められない。左下端の一部分は褐色を呈しているが、被熱による変化か否かは明らかではない。〔最大長19・1mm、最大幅8.1mm、最大厚1.4mm、重量0.4g〕

図4・7は黄褐色を呈する、やや幅広の細石刃である。

背面には上下両方向からの剝離面が観察される。正面右側縁下部に若干の微細剝離が観察されるが、他資料と比較してその出現頻度は非常に低い。「最大長24・6mm、最大幅9.4mm、最大厚2.1mm、重量6.7g」

図4-8は灰色を呈する頁岩製細石刃である。左右両側縁ともに裏面側に微細な剝離痕が観察されるが、左側縁と比較して右側縁に認められる剝離面が若干大きい傾向にある。「最大長23・9mm、最大幅7.3mm、最大厚2.5mm、重量0.5g」

図4-9は灰褐色の頁岩を材料としている。左右両側縁ともに正面側に微細剝離が連続して観察され、正面右側縁においては上半部分に、また左側縁では中央部分を中心に下半にかけて特に顕著に認められる。これらの剝離痕の中には図化し得たやや大きめの剝離面も含まれる。「最大長42・5mm、最大幅7.5mm、最大厚2.8mm、重量1.0g」

図4-10は褐色を呈する資料であるが、下端に認められる折れ面および左右稜側縁に認められる微細な剝離痕は灰色を呈しており、土中埋没後に器体表面の色調が変化した可能性がある。また稜が磨耗し剝離面が明瞭でない特徴を呈しており、風化の影響が顕著に認められる資料である。「最大長30・1mm、最大幅7.6mm、最大厚2.5mm、

重量0.6g」

図4-11は灰色の頁岩を材料とした幅広・厚手の資料である。背面には本資料の剝離方向と相対する下方向からの剝離痕が観察されている。左右両側縁には微細な剝離痕は殆ど観察されていないが、急激に厚みが減じる下端部では裏面側に若干の剝離が認められる。「最大長25・3mm、最大幅10・0mm、最大厚3.5mm、重量0.9g」

新資料の意義

以上、全て表面採取による資料に基づく検討ではあるが、下北半島の北東端の地域を中心とした地域には、古くから知られていた物見台(一)遺跡の以外にも、数多くの旧石器時代遺跡の存在が推定できることが、今回新たに判明した。そして、ナイフ形石器以外に、尖頭器及び細石刃の存在が確認できたことは、この地域における旧石器時代人の活動痕跡の時間的な広がり、継続的にその終末期まで伸びていることを示している。ことに、多地点から出土したものと考えられる橋本・中島両資料合わせて一一点の細石刃の存在からは、下北半島における細石器文化の展開が確実なものと推定し得る。また、技術形態学的にみて確実なナイフ形石器が6点確認できた。

しかも、それらの大きさ・形・素材などの特徴が非常に多様であり、これらの石器が残された背景の深さと多様性を示していると考えられる。

このように、今回新たに報告した資料は、下北半島における旧石器時代遺跡の時代的な継続性と複雑さを示しており、より集中した関心をもって調査を行うことにより、この時期の遺跡・遺物が多数発見される可能性を暗示している。

3 動物化石による検討

尻労出土のオオツノシカについて

ここでは、はじめに東通村尻労地区の日鉄鉱業坑道入口付近より採取されたと思われるオオツノシカの下顎片について報告する。この化石は慶応大学所蔵であり、長い間八戸市博物館に尻労出土オオツノシカとして展示されていたものの、資料の詳細については、記載報告がされないままであった。したがって、今回同地域から表採された後期更新世文化遺物(旧石器資料)に関連する資料として報告するものである。

化石の部位および保存状態

化石は第1大白歯前縁部位下顎体から下顎孔までの下顎枝の一部を含む左下顎骨の破片である(写真3)。歯は第一大臼歯から第三大白歯まで植立している。外側面に一部剥落が見られるが、保存状態は良好で、ずっしりと重量感があり化石化している。最大長は164.5mmである。

化石の形態学的特徴

本化石資料は、形態学的特徴からシカ類の下顎骨と思われる。現生のエゾシカのオスのより格段と大きく、下顎第三大白歯の歯冠長が36.4mmと、長野県野尻湖産オオツノシカ標本番号五四三九(小野寺一九七五)の39.6mmに匹敵する大きさであり、日本列島では絶滅した大型のシカ類オオツノシカかヘラシカのいずれかと思われる。オオツノシカとヘラシカの下顎臼歯部における形態学的差異には、オオツノシカの下顎骨体部は横断面が楕円形を呈するのに対して、ヘラシカは扁平を呈すること、および下顎第3大白歯後葉が、オオツノシカは円柱状であり、中葉方向に傾くのに対して、ヘラシカは2葉性で直立することが知られている。本個体は下顎骨体部が肥厚し、横断面が楕円形を呈しており(図5)、岐阜県熊

下北半島における旧石器時代遺跡研究の重要性



三三三
(四四九)

写真1 ナイフ形石器・尖頭器など (橋本資料)

(スケールは5cm)



写真2 細石刃 上：中島資料 下：橋本資料 (スケールは 3cm)

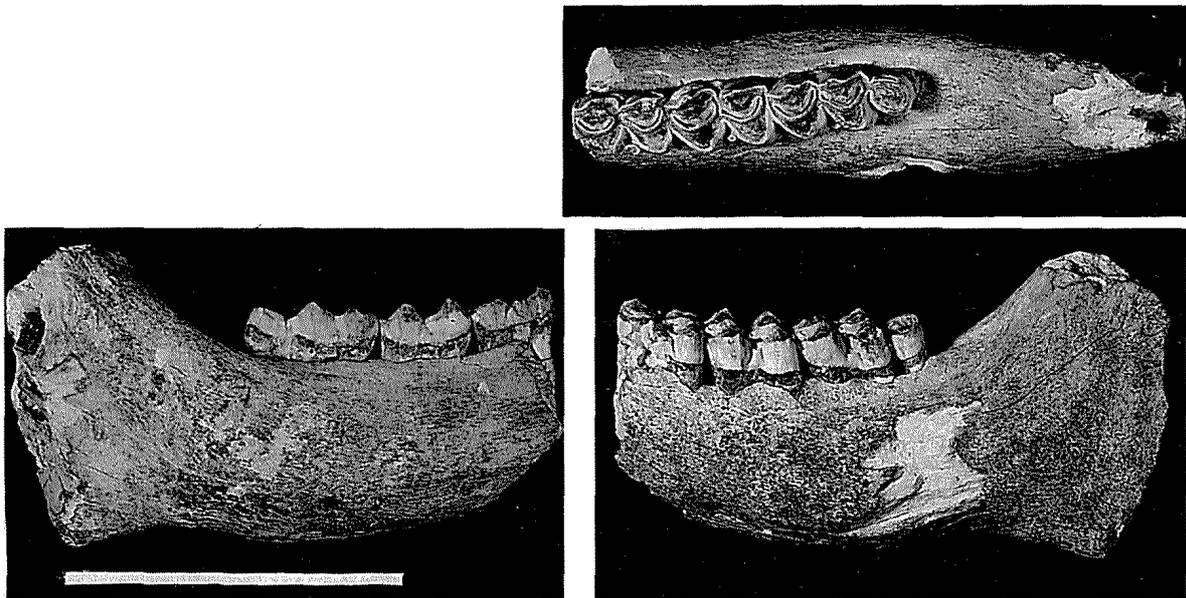


写真3 オオツノシカ下顎骨 (スケールは 10cm)

表1 オオツノシカ計測値

計測項目	(mm)
M ₁ -M ₂ 齒列長	49.5
M ₁ -M ₃ 齒列長	85.3
M ₂ -M ₃ 齒列長	61.5
M ₁ 齒冠長	23.6
M ₁ 齒頸長	23.5
M ₁ 齒冠幅 前葉	—
M ₁ 齒冠幅 後葉	17.3
M ₁ 齒冠高 前葉 (舌側)	7.7
M ₁ 齒冠高 後葉 (舌側)	8.6
M ₂ 齒冠長	26.4
M ₂ 齒頸長	25.3
M ₂ 齒冠幅 前葉	18.7
M ₂ 齒冠幅 後葉	18.6
M ₂ 齒冠高 前葉 (舌側)	11.6
M ₂ 齒冠高 後葉 (舌側)	11.5
M ₃ 齒冠長	36.4
M ₃ 齒頸長	35.9
M ₃ 齒冠幅 前葉	17.4
M ₃ 齒冠幅 中葉	17.9
M ₃ 齒冠幅 後葉	11.5
M ₃ 齒冠高 前葉 (舌側)	9.1
M ₃ 齒冠高 中葉 (舌側)	11.9
M ₃ 齒冠高 後葉 (舌側)	6.9
M ₁ 下顎体高 (頬側)	—
M ₁ 下顎体幅	34.2
M ₂ 下顎体高 (頬側)	45.8
M ₂ 下顎体幅	39.1
M ₃ 下顎体高 (頬側)	49.8
M ₃ 下顎体幅	40.1
M ₃ 後縁部下顎体高 (頬側)	52.7
M ₃ 後縁部下顎体幅	38.9

石洞産(奥村他一九七八)および栃木県葛生産のオオツノシカ(直良一九九七)のものと酷似する。さらに下顎第三大白歯後葉は完全な円柱状であり中葉方向に傾くことからオオツノシカのものとは判断される。日本列島から出土するオオツノシカはそのほとんどがヤベノオオツノシカ(*Sinomegaceros yabei*)に分類されることから、本個体もこれに属する可能性が高い。年齢は下顎第三大白歯において、萌出が終了し、歯頸線が出現していることと、咬耗については各葉とも頬側葉と舌側葉との象牙質が連続している状況から判断して成獣段階には達している

たと思われる。本資料の各部位の計測値は表1に示した。なお性別については、オオツノシカの出土報告例が少なく、歯の大きさ等から検討することが出来ず、現時点では不明である。

下北半島出土の動物化石

下北半島尻屋崎の津軽海峡側では複数の地点からナウマンゾウ、オオツノシカ、バイソン、トラなどの大型の絶滅動物化石が産出し、地点により優占種が異なることが知られている。反対側の太平洋に臨む尻労地区でも石

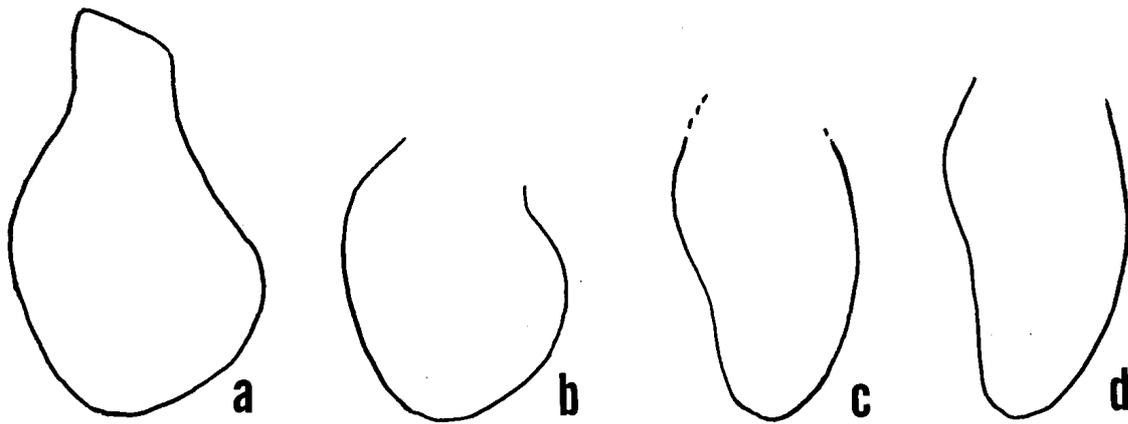


図5 オオツノシカおよびヘラシカの下顎体断面 (M_2 前縁部)
a 尻労産オオツノシカ (左, 図反転)
b 熊石洞産オオツノシカ (右)
c 熊石洞産ヘラシカ (右)
d 東ヨーロッパ産 (現生) ヘラシカ (右)
b. c. d は奥村他(1988)を改変

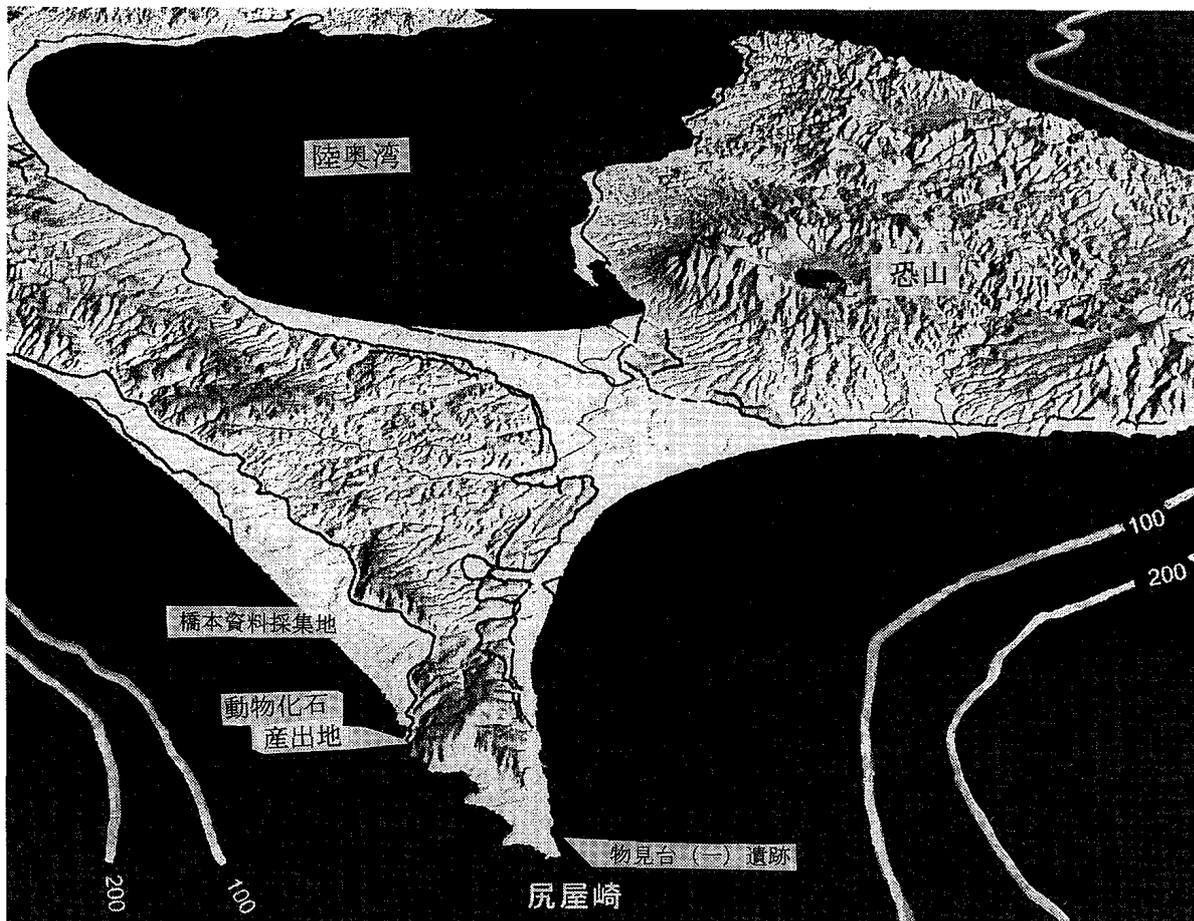


図6 尻屋崎周辺俯瞰図 小池他(2001) CD-ROMより作成

灰岩採掘のための坑道工事の際に大量のゾウ化石が出土したといわれ、その一部がナウマンゾウと同定されている（中島・桑野一九五七、中島一九五八、長谷川他一九八八）。今回報告したオオツノシカもこれらのナウマンゾウと同一地点から出土したものと思われることから、この地点にも複数の動物種が含まれていた可能性が高い。オオツノシカは日本列島から約三〇ヶ所の出土地が知られていて、日本の後期更新世を代表する大型動物である。しかし、東北地方での出土地は、尻屋崎の他には、岩手県花泉、秋田県脇本のみであり、その詳細は明らかでない。そうした意味では、オオツノシカ以外にも多様な動物化石を産出している下北半島の石灰岩地帯は、日本の後期更新世動物の研究上、最重要地域の一つといえる。

4 まとめ

従来その存在が、ごく僅かしか知られていなかった下北半島における旧石器時代遺跡に関して、既知の石器・化石と共に新たに確認された二〇点の石器資料を基に検討を行った結果、つぎの諸点が明らかになった。

下北半島では、尻屋崎からその南に位置する太平洋側

下北半島における旧石器時代遺跡研究の重要性

の地域において、旧石器時代の各時期に属する石器が発見されており、それらの種類や素材は多彩な様相を示している。これらは、多様な特徴をもつナイフ形石器、尖頭器、細石刃などから成り、立川ローム期から縄文時代開始時期までの継続的な石器文化の存続を暗示している。特に、細石刃資料が中島全二氏の採集資料に存在していたことと、近年の採集資料の中にも含まれていることが新たに判明したことから、下北半島においては細石器資料が予想以上に濃密に分布しているものと考えることが出来る。また、同じ青森の津軽にある丸山遺跡（大湯二〇〇〇）における細石器文化が、南北の様相を合わせもった複合的で興味深いものと捉えられている状況（稲田二〇〇一）や、この石器群のもつ汎ユーラシア的な意義に照らしても注目すべきものである。

また、既知の物見台（一）遺跡や中野（一）遺跡を含め、下北半島で旧石器の発見されている場所は、いずれも現海岸線に近い低地である。この事實は、旧石器時代の海面低下期の古地形との関連で重要である。すなわち、氷期の海水面が100m低い時期には、現陸奥湾は広大な盆地を成し、尻屋崎周辺には大平原が広がっていたと考えられる（図6）。そして、物見台（一）遺跡をはじめ橋

本資料採取地は当時、現北海道や大陸北部により近い状況の平原と、山地の境に位置する地理的環境下にあったことになる。

さらに下北半島の旧石器時代遺物の発見された同地区では、本稿で報告したオオツノシカをはじめ、後期更新世に属する絶滅哺乳動物の化石が多数産出している。大型の哺乳類の絶滅には人類が関与したと想定されることが多いが、日本列島で更新世の哺乳類化石が人類の活動と結びつけられる出土状態を示すことは希である。したがって、下北半島のこれらの地域は、旧石器時代人の生活様式及び、それらと大型の哺乳類との関係を探る調査が期待できる稀有な場所といえる。そのような意味でも、本地域における旧石器時代遺跡研究の重要性を再度強調したい。

謝辞

本稿作成にあたり多くの方々、機関にご援助を頂きました。記して御礼申し上げます。

江坂輝彌、村越 潔、橘 善光、工藤竹久、橋本喜一、越善専一郎、小山卓臣、佐藤孝雄、鈴木敏彦、澤田純明、渡辺丈彦、渡邊高潔、水村直人、東通村教育委員会、日

鉄鉱業株式会社尻労鉱業所 (順不同・敬称略)

文献

- 稲田孝司 二〇〇一 遊動する旧石器人 岩波書店
 大湯卓二 二〇〇〇 第二編 木造町丸山遺跡 青森県
 立郷土館調査報告 第四四集 考古一二
 奥村 潔・石田克・河村善也・熊田満・西田須賀子・石田一英一九八〇 岐阜県熊石洞産のヘラジカ化石について 大阪市立自然史博物館研究報告、三一 一三二―四
 小野寺伸吾 一九七五 オオツノイシカとニホンシカの化石 野尻湖の発掘一九六二―一九七三 共立出版 一五四―一七一
 小池一之 町田 洋 編 二〇〇一 日本の海成段丘アトラス 東京大学出版会
 工藤竹久 二〇〇一 第五章 東通村各地域の遺跡 東通村史 (歴史編Ⅰ)
 橘 善光 一九九四 むつ市史 原始・古代・中世編
 平井正和 二〇〇一 序章 東通村の地質 東通村史 (歴史編Ⅰ)
 長谷川善和・富田幸光・甲野直樹・小野慶一・野莉野

宏・上野輝彌 一九八八下北半島尻屋地域の
更新世脊椎動物群集 国立科博専報、二一
一七、四四

中島全一 一九五八 下北半島尻屋崎における第四紀哺乳類化石の産出状況について(第二報) 資源研彙報、四六、四七 三七、三九

中島全一・桑野幸夫一九五七下北半島尻屋崎における第四紀哺乳類化石の産出状況について 資源研彙報、四三、四四 一五三、一五九

直良信夫 一九九七 日本および東アジアの化石鹿 直良信夫論文集刊行会